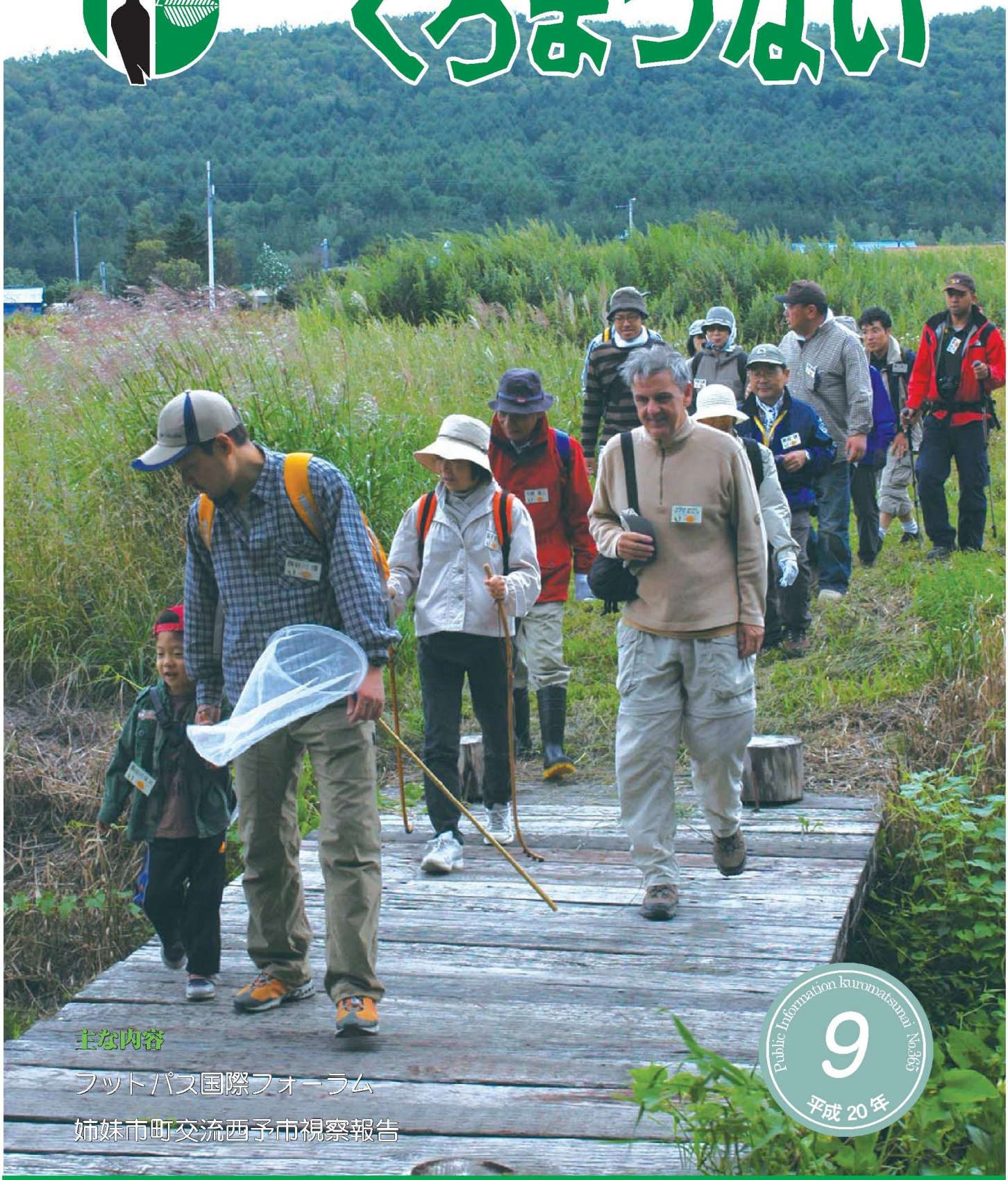
広報 くろまつない



主な内容

フットパス国際フォーラム

姉妹市町交流西予市視察報告

Public Information kuromatsunai No.365
9
平成20年

「楽しく歩いていっぱい虫を捕まえようね！」・・・フットパス国際フォーラム

フットパス国際フォーラムin黒松内

8月23日、24日の両日、黒松内町フットパスボランティア（会長・新川幸夫【黒松内町農山村資源地域協議会】）主催のフットパス国際フォーラムが開催されました。

英国の専門家のほか、道内外のフットパスに先進的に取り組まれている方々を招き、基調講演や事例発表、パネルディスカッションが行われ、本町のフットパス事業をより充実させるためのヒントを得る機会になりました。

基調講演

フォーラムのスタートは、マイク・ミルズ氏が、来場した約100人の前で英国のフットパスを紹介する、「ウェールズにおけるフットパスとウォーキング事情」と題した基調講演。

ミルズ氏は、「私たちにとって歩くことは最も愛すること。ランブラーズ協会は、歩くことを推進し、通行権を守る活動をしています。」と切り出し、イギリスのウェールズには、約2万kmのフットパスがあり、国民の77%がフットパスを楽しみ、最も身近な野外活動であるということも分かりました。

続いて、人々の生活の中から生まれたフットパスの思想、ランブラーズ協会の設立経緯、フットパスに関する法律の制定、大衆が自由に歩く権利を得るまでの歴史などを紹介。

しかし、ウェールズのコース維持の予算は少なく、また、イングランドでは、40%のフットパスで、歩くことが難しいという問題を抱えているとのこと。

ミルズ氏は、「愛好者を増やし、美しい景観や自然環境を守ることが重要です。」と訴え掛けました。

最後に、「日本と英国では植生が違うが、チョポシナイコースはどうでしたか。」という質問が来場者から投げ掛けられ、「完璧なコースがすべてではない。その土地の地勢を楽しむことが大切。黒松内のコースは美しかった。」とミルズ氏は回答。

今後の黒松内のコース整備について、「完成後の姿を描き、ブナなどの自然や地域遺産が見られるように整備していくとよいと思います。」とのアドバイスがありました。

ウェールズランブラーズ協会【英国】

フットパス監督官　マイク・ミルズ氏

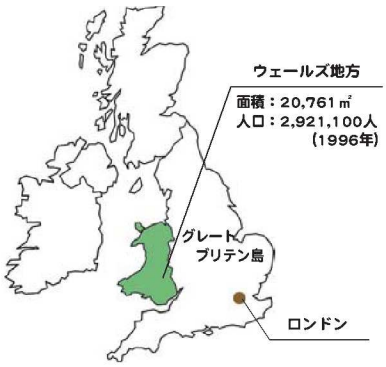
ウェールズ地方において、通行権のあるフットパスの監督と訴訟問題を担当。

フットパスウオーキングの方針づくりやフットパス整備の指導にも従事している。

(注：ランブラーズ協会)

田舎歩きを楽しむ人たちの権利と利益の保護拡大に、積極的に取り組んでいる組織。

国立公園化を支持し、長距離フットパスを指定、誘導標識の設置を促進し、フットパス網の維持発展に大きな役割を果たしてきた。



▲英国のフットパス

Footpath International Forum in Kuromatsunai

1日目
チョポシナイコース

トワ・ヴェールⅡから出発し、黒松内で最初に整備されたフットパスコースの「チョポシナイコース」を通り、「寺の沢川コース」を経由し、黒松内温泉「ぶなの森」までの12kmを歩きました。

1日目の、夜の歓迎交流会は、朱太川の鮎の混ぜ御飯など、黒松内の食材にこだわった逸品が並び、参加者は黒松内の味を堪能しながら、相互の活動について、夜遅くまで語り合いました。

▲黒松内町のフットパス
ボランティアスタッフを中心に、コースの整備、イベント開催などの活動に取り組む。
現在町内には、四つのフットパスコースがある。

▲根室市のフットパス
牛の放牧を眺め、青々とした牧草地を歩ける厚床コースと海辺の雄大な景色を楽しみながら歩ける別当賀コースがある。

▲町田市のフットパス
都市郊外にある多摩丘陵内の里道を歩くことで、自然体験を通じた、地元住民間の交流を図る活動をしている。

パネルディスカッション

基調講演、国内事例発表に引き続き行われたパネルディスカッションは、コーディネーターの小川氏により進行。

最初に、それぞれのパネリストが各地のフットパス発足当時の苦労話を披露。

伊藤氏は、「周りの酪農家は、そんな道をつくって誰(だれ)が歩くんだという厳しい反応だった。」、新川氏は、「コースの整備は笹(ささ)との戦いだった。」と、本町の調査・研究事業としての開始当時を振り返ります。

ここで新川氏から、ミルズ氏へ「コースの状態を適切に維持するのはどうすると良いか。」と質問があり、「フットパスは多くの人が歩き、踏み固めることで維持できる。たくさんの愛好者に歩いてもらうことが良い。」との答えが返ります。

続いて、小川氏からの「フットパス事業に食や景観を連携させ、観光に活(い)かしてまちづくりに結び付けるには。」との問いに、「フットパスコースをつくるのは感性が大事。センスのよいフットパス整備に取り組んでいきたい。」と、神谷氏が今後の展望について話し、伊藤氏は、「自分でもほれぼれするような景観を見つけることがある。観光協会とともに、良好な景観や食について考え、観光につなげようと専門家やアドバイザーに相談するようにしている。」と、自身の活動を紹介しました。

新川氏は、「現在、添別ブナ林と、トワ・ヴェールを結ぶ新しいコースを考えている。実現できれば魅力あるコースになるだろう。」と、今後の新規コース開拓構想に思いをはせらせていました。

神谷　由紀子 氏
NPO法人「みどりのゆび」事務局長
97年、鶴川地域まちづくり市民の会設立。
2002年「みどりのゆび」設立。
活動はフットパス振興による啓発、緑地保全の基金設立、農業支援、人材育成のための環境教育など。
2007年「日本フットパス協会」設立準備会に参画。

伊藤　泰通 氏
酪農集団AB－MOBIT代表
昭和63年に帯広市民生協に入社。
退職後、平成8年に家業の酪農業を引き継ぐ。
平成13年、近隣の酪農家とともにAB－MOBIT設立。
平成15年からワークショップを開き、フットパスコース整備に取り組む。

新川　幸夫 氏
黒松内町フットパスボランティア会長
平成10年からフットパスボランティアに参加。
現在、町民ボランティアスタッフ21名と事務局6名で活動。
既存の地域資源をフットパスで結ぶ黒松内流のフットパスづくりに取り組む。
フットパスボランティアのみならず、黒松内岳ブナ林再生プロジェクトなど多数の団体の代表を務める。

小川　巌(いわお) 氏
環境市民団体「エコ・ネットワーク」代表
信州大農学部林学科卒業後、北大大学院農学研究科を修了し、道職員に。
退職後、野生生物情報センターを設立。
8年間の活動の後、92年にエコ・ネットワークを設立。
北限のブナ林が縁となり、20年前から本町の地域振興に関わり現在、本町のまちづくりアドバイザーを務める。

Footpath International Forum in Kuromatsunai

2日目 西沢コース

あいにくの風雨に見舞われましたが、歌才自然の家からトワ・ヴェールを目指し約10キロの「西沢コース」を歩きました。

中間地点の中谷牧場では、参加者にホットミルクが振舞われ、雨に濡(ぬ)れ冷えた体を温めました。

正午にトワ・ヴェールに到着し、直ちに散会昼食会。

参加者は、黒松内の「食」を代表するトワ・ヴェール製品の味を存分に楽しみ、フットパス国際フォーラムは盛会のうちに終了しました。

トワ・ヴェール特製
オリジナルランチプレート